823
.M8K5

湖月鈔

若菜下

35

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

71-52

藤袴 并八 孟 以詞并哥為巻之名 但詞にはらにて
かけり。らにとあれども此字をハ如此出なり
哥 河 此哥の跡の家にやつれしより藤袴はうけるよるべとふかきを
細 源三十七 八月九月のことなり折にハ三月より御宮仕
のましハらんとすれど 花 堅の並とこと・愚按 彼一段の義は
らしくハ源氏六条より成べし

内侍のかミの事 細 孟 尚侍内侍
のかミに御宮づかへあるべし。細
里ながら内侍のかミにて御
むかし例ありといへども 花 ナイシノカミ 尚侍
孟 里亭にても経し尚侍
而後に入内のことわりお
遠ことさしたる 花日
くハりかよ 細 自然は門
の竈にも思ふかよの
わうしもくし 花 帝の御
詞にもくハりけれど
かくもわづらハしさに
びんなき事ありき
かなかハしくなる事
哢 御中ならぬさ
らなりけるに
いづかたにもふかく思ひとゞ
められたてまつる
細 ふかく秋は思ひしれ
ことさら御女なる
よそながらそて女御をも
哢 源氏もちかしの事をも
も総なりつゝ給ふとい
つゞくとハいふべきもの也

内侍のかみの御宮づかへの事を。たれもたれもそ
ゝのかし給ふも。いかならん。親と思ひきこゆる
人の御心だに。うちとくまじき世なりけ
れバ。ましてさやうのまじらひにつけて。心より
ほかにびんなき事もあらバ。中宮をも女御をも
かたがたにつけて心をき給ハんハわりなかる
らん。我身ハかくはかなきさまにていづかたに
もふかく思ひとゞめられたてまつる程もなく
あさきおぼえにて。たゞならず思ひいひ。いかで
人わらへなるさまに見きゝなさんとうけひ
給ふ人々もおほく。とかくにつけてやすからぬ
ことのおほかるべきを。物おぼし知るまじき程

うけひ給ふへし
なつかし。兕咀くらし
さらにいうらあらさ酒
盃取のさまさいふても深の
うきまかせみしてあるを
をれし給ふへあるなれども
とし　御同歌　細　なつくに
此意ゝする事も取きうまそて
いつしとく
いろいろつゝてまつへりそて
あれて　盃塩梅をなす
まうたきとく　御むかふの
人宴するなさきそとおくれ
さんとく
まことのちく　細　源のんけ
あなべとこと内大臣のとし
つりのふ取にて苦勅にも
え元将て去給つるし。
おうけつる我物に理をまし
ごとなるくげさやぎぬ
よさいとそてなるまと
それもりくてもえぬらう

細　兕咀のもと宴まそてへさくわしぶるまりふもうし　盃　人をありれと
みられれはさ酒くよ坐りわりんされ。人志
まざを物るけしさらとそてうろきさ酒もあ
しきこととへなけましこの坐とくのはろろそ
（御　源之）
へのむつしくんつきるさも。いうちすつつく
まうけりてきるれて。人のきしとろゝくうある
すらどんざさまくもあるとうへ。ざまそとの
ちく坐とも此義のかりさん所とくくり
（内大臣）
まそ。うけぞらてくらそするら。けざやさ給
（同 諸日本記 諸同）（同 清 ）
べきしふもあしね。はるよ戯とそてもかくて
（てもこ御筆）（同 藤之 御殺多の中にてつびて人の書に）（内 おりても 源の方に）
もこうまうけく志さき酒それてん
とるやましへよりてさはうるべきことのあり

お花ハおほとつゝ細よ。命そ
ゑつべし。入内ありてハ帝
の竈を中宮女御の位ん
どきまべし。又源の家の
けまうぞ又陀帝との名を
さますべきるをとなて
なふくしをせわすべ
盃女かやまハ能とけそ
細もしひまさはされい
なそんべくものとも

らまきさうひ名文　三条大
宗前やくとのまのかみ前竈

ら。中くこの坐やらうぬめしめそ給は
（盃 実父出来てよりハ源の方のやうよ假なねらし）
よそぐうり給ふ気見もるとさ坐くのさん
りそるすをとりくさへつ。人もれども
すげしうりかやふへことを。ま母るしべ
（盃）
ともうらきしてそ色らしくろふすめつ
ゆやも坐えをんいづつきもくいとろ
（細 源関太后之）
げよいとうるらし沢流さ酒どことよえ
ござうけるんくれんとともるし
給りん世の人りみぬ方の気極と
（盃 取の歓分之）
うずめつ。夕曇の竈乃義げるの氣色と
（御 かうくの御之）
らしちくてこ出しめへ分さ酒いとおり。
（同 為祖母服 とくむて花田之）
うちそとこひ気のれぞ。ちろうきさ給みや

まてくらり。三月九日と
古きをまさんでくらり。三月
廿日也。今玉かづら祖母
の服とさだまり孟三条
之大宮被薨するとこに始
て出るべく
宰相中将　細 夕霧春
儀よ鼠色のなほしよ
てえいまきたまふ蘭
のきぬならでは喪を
あらはし　弄河
抄おなじ色の今すこし　ま
せうるり　孟 夕霧も同じ色
着て孫服之人の浅深
によりて色の厚薄あり
夕霧は一階浅く
つくれはすこし色の厚き
えいまきき　花 服者の巻
纓をいふなりとのぞ
くんし　河 巻纓者着服
之儀也
そしめかしく抄まめやかに
細 玉鬘実の兄弟の由
をいひ知らせたるよ

つれてれいにかはりたる色あひにしもかた
ちはいとはなやかにもてはやされておは
するを御まへなる人々はうちゑみて見奉るに
宰相の中将おなじ色の今すこしこ
まやかなるなほしすがたにてえいまき
給へるすがたしも又いとなまめかしく
きよらにておはしたり。はじめより物まめや
かに心よせきこえ給へば
なれてうとうとしきさまにはもてなし給
はざりしならひに。今あらざりけり
とて。こよなくかはらんもうたてあれば
猶みすにき丁そへたる御たいめんは

夕霧はまだしらぬうちの
ごとくしたまひし
今あらざりけりとて
細 兄弟はうとうとしく
しかるべきことなりとし
内より仰せ
細 内より玉鬘を御使と
して源氏へ仰せらるるその
中を取り玉鬘の返事へ
よきやう 抄 内より仰せ
を源の夕霧して玉かづ
らへの事
あさがほ 河 朝面 万葉
第一第八巻 何も人数の
事なり

人づてならでありけり。殿の御せう
そこにて内より仰ごとあるさま。やがて此
君のうけ給はり給へるなりけり。御
かへりおほどかなる物から。さまよくきこ
えなし給ふけはひのらうらうじくなつかしき
につけても。かの野分のあしたの
御あさがほは心にかかりて恋しきを
うたてあるすぢにおもひしを。きゝあきらめて
後は。猶もあらぬ心ちそひて。此宮づかへを
おほかたにしも思ひはなち給はじ
かし。さばかり見所ある御あはひどもに
て。をかしきさまなることのわづらはしき

しまさにあひさらぬしるしにて。異云源氏と女なかしこのり 愚案 異の説にこえてこゝかく
しるきこゝにあるをけれ見つらしきとへ女房とつとを源氏しあらし業上るしのこゝかく
おくへきこゝらくし
むらしさま御たちら 細 中にて女御の御ためにいかばかりしさまの御人さえ
人ならぬさま

細 夕顔のつくりてのにくの
かうし花色ハ源氏の給
こゝろえかうと人のきら
ぬ所にてうせと給よ
し大臣のうまて

上の御氣色の 細 おほ人
まことにすまじきことに給つ
とさうゝの御細と訓尺
歩きて 此夕顔の近く来
ちらんとの御給ふを
のかつくさハやうハ帝の
御心うらやましよそ給ん

出かさるんしとさそふ。とかうすしんしりて 細 夕顔も何ともえんなかりつ
ぐらからされとつれなくもくいかうまて人なり
さうもとおしとも給ふことゝ。ゆめしさえさんはいはい 細 かの女房達
が給へきとかしきてそこばくさうら人
も。もてこしさりそきらく。はなかしのうしろ
人とよそぞくきめへりぞくさてしまさこと
と深かり 花 源の法せくにてにまかせさ
きくしらとらつくれて御やうまやのえ
給ふ人のけはしさのさてすくぬもとらいとさ
けんしのありへるとやうのとしもなかりつ
の給をえて夕顔の御給ふまて 御 かのかうの御心
人とまりつくしらるけさまへ御かけしとは

わかれなしし源の代まふとのへ
ること
ゆかくも。この月 細 玉鬘
細の御ふけかとひきまりし
くてかくひつけあふく
八月く。三月ぶり大臣の御
あ月く。八月ぶりて三位服
のうし花よけ月とあり
ハ浅りし 師 此月ハ八月
し。三月ぶりはなうせあま
し夜のうちその喪をま
也。祖母の服ハみ十月まれ
ハ八月ぶりは百五十日にて
あうらく。但陰服ハ日を
えうひてえゆくもあり
ことなく
十三日よりうつら 河 出河案
解除なうけて。陰服の
終のうらし 師 服とね
えそし疑とするに十三日
老日かうかや 細 今内大
ゆれかくなかど
内裏さとのうつハ此三条の
え御服ときえまるよ

のびやかならむしとにうつしまいらせ給ひて
さのぶなりくゆるくをこの月はわつかを
よべしと日のつくなんとかくらすかけり
十三日よりいつくまで給つきよりの
給つきりとおもしけれてもまさりさ 源氏の 夕顔もと
くるんゆうよしあらてまへとさうひさ 其夕顔の因なおはるとみへんとし 細 かのうへの御
まうんもこゝろくしさやうまやゆるんさの
びやうふさしもよく御しめしのすこの
ゆづくなどのさえしさきかとくよあひさ 花と源の姫をうれへ
くろしきこととしけるえるえれいと 其かうの御
らくしあらすれはしこしとつりませのうん 夕顔の御し
ことらしけせしのびつくさひあへらうしう

まりくさ人あまりしるくきこへくるまのかへり
いとらうあり 細 をまとめぐらしも夕顔のかうし
かくれど 細 中将はおもひくさ地とし、秀能か歌 家どぐ[illegible]
の夜家かくれ色殊と吹嵐るみ此語勝之
きても[illegible] 細 [illegible]
[illegible]いさいなくて怪服
八日しやうにさうつハ[illegible]
[illegible]此衣なく
てつとくし 花 内大臣の御女
[illegible]は源氏君ハ何とそて又
[illegible]
[illegible]夕つやのむしとい
[illegible]夕顔ハ和歌か[illegible]
[illegible]
此御かうし衣の 河 此紙母
の喪服[illegible]
[illegible]
[illegible]源氏の[illegible]
[illegible]喪服[illegible]
[illegible]
喉[illegible]

しきるれば ぬぎ[illegible]給ひしも いとあはれ枕
くゆりものゝ をとさへ もあやしう[illegible]
れぬところの ところえがほに よそ[illegible]
あやしう衣の[illegible] いみしくこそ[illegible]
じらられとのまへハ何[illegible]
[illegible]はずしてまとう[illegible]ものゝ[illegible]
れ給ふ[illegible]こそ[illegible]
[illegible]給ひきれとそ 例[illegible]
[illegible]
つゝしよりも[illegible]ひよりそん らう[illegible]の花[illegible]

[illegible]
[illegible] 細 [illegible]
[illegible]
仮名の時は[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 [illegible]
[illegible] 蘭 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

面白きともあはれともまよりさしとのつまより
さし入て 道も[illegible]めんどうきゆへ[illegible]
そこよりもゆかしぞしまへ[illegible]
これよりもひきうしてとり 白き袷 薄色の[illegible]
じみじう
おなじ壁の家にやつして[illegible]
それはしようとしぞからの[illegible]
なるとりや いとむつかしく[illegible]
れどこゝろぬき[illegible]やさしら[illegible]
だけのよそゝけさこの人乃家[illegible]

うちそへて一向にうちふらへし
あさましきの　細上の三条宮の此服を同じやうに見給つへきを云也。孟 花
衣の縁ありしとしれ於云言之。宮の心ハかくかゝりと云心也
衣のいろかはらぬとうん世のすゑの家よやらひくとハあひと見よ祖母の服よやつれ給ふ
ふしぶそたにひすしあらぬ　此詞ども見けるなり
みちのそて者ハ河あまちのなのそてるうひさら也のごとくにおかんと見ゆ　花
こきいろ　もとよりうさの末の詞よなけて見つらし　抄同
なめりよ　細此詞花鳥の説も両説あり夕霧ハ此種延ハ兄弟也されバ同服と云
べき縁も有ることぞかけきなくよもあるまじき説よくらべ川べきとし　或いのなまされ
又の説ハ大かたくと夕霧との中を故源のもれバ兄弟よハあるまじくらげたなべきされ
どみえうつよきそへ人しうべきよい故もぞしと業経のゆかりハまべしとし實ハいらしと
なりなし。是素細此故説らじめハ花鳥のら此説え、弄花也おきし。孟入道太府の説も花鳥
の説よ付給ひし云く。此ほの夕と連枝のゆかりすくそくらけさのべらう。此業のうもとゆ
かりどもなり給ふべきにならべきしもあきなどならぎ（べ）ろうかうも給ふと
おのしひのかれたる寺のんかげせし。かりてのなりと隠してうるとぞる訂し。下の詞よかやうに
て一旦ゆるしられる故えいらざとしてるそ寺のんをえし給ふし
あさましきよかならじとも　細夕霧
の詞也。むろくろの心あり
と思ふるへあひけんと
の詩ひおきろうくしいさ
まかあもえのれたる中
とおぼしなすやうどもとるなりいとま
ハらもあるとの心ぞのかれんあくし　抄　夕霧の心
ありなかりさゆんをいらくとの縁つらしと　あなくの詞也
ひらはしひく。わさくをもみうきを見なりて
うさえ給ふんとせまかく世のまかやうかは

そへのすさまじく
まく世のかしうしけんが
ハ細かくて縁をまさん
とこあつれいもとくとものかく
のろうくとありたく給ぞ
るう　細あまけとしく
今もさ
ひいまなよくへやうひ出給
是ば分をとつしてくともあ
くくえるらそ。是をひぬ
れハ今もかくぞみゆるよ
とるなか分をつくしてを
あさんとぞ思ふよ
んのえよみど見給ふ分てそ
とそえいだとうゆしく
胛　柏木の無相せしそ
そ思ひつきよ今ハうら見
背と思ひしこそさとこう
ましかりれこと。弄花
のへぞそあとうゝは
ならし

致仕の大臣も世を思ふ人かれかく　晩秋
きこえけるさすらども思ひなくなりすくる
も川め給しぬ心の中といふくう
さらべきにありく思しうしとまんか
よいうしうくこめ給と。いまそそこ見ゆ
るべくまん。細柏木之　柳中将のしれハ
なりそや人のよみどもたひ給ひ
こそいとおこかましくかくへ出すなりたる
これ中わく此ハ出りひうしてつね
兄弟なれハ此あまり離れしとのかう哀さそ
れあかりそんうかなしれ人のことに
めつかうしくるなしと給ふをいて
しくわさもうよく秋とてるよ出り
あはれ夜やうよ世の中をなけ

くんのきえやうく　細そこ
わそくんのえんとふう内侍
めうとし　抄既私云源の祐
よ此文体をさきふくよ
とらうゆ未尚侍よハぬ
さらぬうや従又此分ひ
られども志かくなるま
や尚るよ味ままふかは朱
こそ類そてみ石安堂の
あるうしし

の今をしてし　与本あの
おしさ日付よ書上をえ
ありしるまし

どくさうつさられハ此あふぎのゆゑ
やうしくひさうりつむしと覚しされハ
うさされ気くれあやまらもいうしさんの従
いかのつくしらんしふくるかくやうらも你ら
ん他とくそてうりつゐくよい御すらしを自ら
さ御りしされどもやもくらやまゐしくるん
らそ入くそ給あれハいとつくおもけさ
てくらのねまうくかもうしらそくける
みとらかしさまよつけてもよの今もそて
身かしこそかがしれけるひとどへうりの
他じうまてをれのうまれにしえとどまらる
らんつうくよりさらんとやもとしりど正ひ

細　夕顔のんし師夕顔の詞し
細　奥へ引入給ひて
おそろの詞よりんへ
抄　夕顔のんし
夕顔のゆ家し
細　紫のうとし
伯の夕の詞し
むかうつうし

あくりみじ　細おもうく
よりかゆをるやもそや
さうくし
あらくよしそ　孟沼く
師文体のやし玉ぶつ
のけなるみのやうしとき
さ給て心のうらと排
当をしてまふしむハ
くもおひ給をぬすや
文ありのまへし
細まへしハ会んし文聞給とに
く吸兵アば文好きに
てうまんし給うく
うへとえてまうりあひ
てはしめそこくかうて
くりにおひあて
師先をお替方のんを
推等ひそ筆つまく
みなとのまてよおかつ
のかハ箱くりせしを
ゆこまハなどかりつき
ての行ひしし　細
きそも人が御ハ　夕顔の
御覧しいつ方さ御かし

つゆまへよまうりさすへれハ出のさひてかう
つりあどやおし給との文づくへをおふくにそ
むりのまつれさやうどのれんじまへてるひと
まくいしらかつさ義をつしいひはやま
し給よらやしきまかつんとかりよるん
ふかうしきされどさ京雅の行幸よらん
とこそりあてハいとめぐらくおうしそら
とおよまてりつさ人ハおのうよをこなき
まてえしもこやつへのもとらいりてをるれ
じとおひてるんけるすもうくりのをしる
どのまへべきてを人が御ハいづこ(か)つけて
うはいぬぐひて他し給らん中がめりくとうう

細　源の詞よし
細　源の詞之
源の夕顔よかあ入給ひ
孟本　志やくけよ
堂まる　ひとく
みな泉雅の
帝とく
夕顔の詞
おそくの文体の今とく
妖好し

て給るべきぞこしく
思ひぐるの中さ敵いふ
さうにすし給ふら似ぬ
ひゐらんと中守りにの
ゆゝさよ夕霧の源氏
よゝ給と
まぐしさうもさら 細 思よ
てハ女御よきこえさりき
さ作 のでもなけ逝ハ
知立給らんもめ尋とこ
のきさらへさらん哀り
哭 これさしさまぬ哀れる
哉よ卯花の乃給とう
さらん給らぐ源氏の旧見
対の出申りてうしき
やし給ひんとあり
さうれなすらし 細 源と
女ゝの公よと此中申
てそいらしさらくへうき
このきくさしもおり立
て念比よの給ふよめと
しくし

びるまさすがにてかゝらしゝゝさこゝさてん
やんごとなくおぼしことゝもそのゝしりの人々ぞ むかしよ天子の御心ざしの事とし 細 中宮の弘徽殿にも及びて
いまじき中宮ひありとも立ちなくひのふか
いかりぞさること ことなくてそ御心ゆ、らゝいひとわんぐる 花 ゐつらんとし
よ心おりしてるまゝとわざとしさるもとらの中こや
づくみまゐるぬるゝなりしゝひきさくさう
んさ海よ中心ときさ給ひへもさら中なう 花 ゐけるの心し 師 ゐんの中き海と思ひ乃ことし
らひそえいとくおしくらんとしあまた
なと心れくさしゝ給ふらやりけんびと 細 源の君 雅衣なるらしき
つるらんのら人ゝをおのぬかたる人され 細 心け尊之
とてゝうしもるれとべてうるこのんど
あしさくさらすぐさてあやよきさ人のらし

くるまの 細 ゆきりの中なり
ありまくともうけえまれ
てまゝに思ふべき物と祝
そのやうりしありそとハ
媛梅ふるとし 師 此此哉
の事入るまさ敵ともなき
しりくくてけよれやるよ
うつきてつく人へくれう
らと 世物ひめすとし
みやくふきの衣よ
おゝ之定陰中流 云夕霧上
の事を源の給ひ物を
く此頃たるまでりとつ
くりおりてのまゝ例て
つまぐし此とりう
よの帝ぐり 細 みちく中く
の行れなふべき様しる
こさしるすり
つまくしくの給ふを
御母君のおもてれよひ
とさきしし言ふより
こまそくもしるされへ
うくいう

とおよくりていうかくしさつきうおり遠
てよのそく氏乃衣よいひ立しらしとかん 花 夕ぎりの事とし
わされさりしつべかしわそさし山里よるまん
ときとしてよの中じたくさ思入まへておわ 内大臣のこと
らびとられへしよいとおしくそのくまさ 思ふらと云
しらじめらるからる宮よりく物めかしさと 余情 ことし
てよの中じをひらめつらは給ふありしてつ
きくしくの事かひるすそ人々ぞかにいふや乃
中人そそびとなるかべし。いまめかしうなるを
ら海めてゝるさ御しさくさそおよつしらく
おやしろうもめしくるどくしておもひへのや 細 震旦そのこと
をりしんぞそ又あまつへふもいしとうつう

しごとくてえらくこ
師 源氏の玉鬘を尋ぬる
公達とけさくしじめやうに
人の申しと夕霧の申詞也

大臣のおぼさざ也
細 大臣の内しらるく
ひとと又姫くじいひども
むくさの天意としの人
なかしし

ひさしくうつらうくらくくおつき地の。
ゆかしやけざるみどみも物がめりしかば。
さりへちくてじ人のつるによねがちを給は
らよそ細がふかうじきるど。の給ふしきの 細 夕霧の源の心
とえんそ給し こまやかしくれんば。年ごろうくてたしくここ 細 夕霧の詞也
ちうそしおもろはんぶしを。ひがごと也よそ 細 源の心なとうけ給ふうし
人の心ゑ 人へはしをうれがのゆかじをさめうよおんと 細 内大臣也
をひけてぶ殿のおほきさ也のくさうり。 嘩 ひが事也 内府へおぼろけのまどもや入られよ是
ゑ氣ら一づをとくらうおもりよ。いつへあげうと 内大臣の文侍也
ゆかしよくべぶらうしひてこくいとよ 源の詞也 細 源の詞
げうさしとくれ。よくやづくへもよ。おすご 細 実父の事 孫よりくらそさくへうる也
ととも。は心ゆりしてくしるんしもがさん

女は三にしたがふ 細 礼記に婦人は從人者也。幼則從父兄。嫁則從夫。夫死從子。註云從は謂順其教令と云々
嘩 此所はさうしの三從の儀る
らが源氏も思ひ又すれ
ばおぼつかの思ひきぞひ給
べりれども又実父ありき義
又のたまはせ給ふは夕霧
さびひぬへしとのまくし。
おぼれどもふ詞よそは
ゆゑ也
つゐでをちがへて おまへは源
の詞かくと云ふさる
ますとよこめそのまま
をまよ内大臣の推量の
ごとくすべば我まろにそ
まべかれどもおさへはなれ
ば今は実父次第にて
よろしくし 細 今は從よ
内大臣の筆よりてこそ
ごかれをも次第をまへて

さ侍るべき。女は三にしたがふものにこそあり
なれど。ついでをちがへて。おのが心によ おまへ細 女說也
まかせんことは。いとあるまじきことなり。 おまへ夕霧の詞也 内大臣の内へうそ女の心のうちを思ふ也
くらくよやむごとなきさまにて。
也と 人の心へいえぞのすぢの人へうせとよ 内大臣にかうとを
そ地も給つぐをてかうとよくゆづりつけ。 おとうと 嘩 ろうせん
みざりの文づくへのはぢよらうろうもん
とかがしとさつ。いとうしこうくとおうこ 源の
とうらもらん。しろこびやされりうさと 嘩 或本しろこひの字あり一説
なよ人のこちやはしろうりと。いとくうつし 夕霧の詞也
さき也よくこうやりのままはげよさはなひ給 細 源のなし おまやうかさくもし
らんうしとゆかでまよ。いとおかしくて。 源の詞也 細 曲也 いうしまめが
正直にまろうく

とのかくのちくよはいかでとくとのかくれは源のかくしの語ゆへ
くらくふみ　細花孟師本なし。晴本えうらふもとあり。師ちゞの御心ぐの心をそ
背の源氏よりうり給ふ　晴内とハ玄粲法のうちに法思ふ人とちの御わきさるうし
くらくふみもとつふ本もあり円心
そのもとゞの　細紫ふみきつの御はなくの殺よハいるすそくへかこれもとし
此かそらうの宮仕　細くるはよおしまうすは玉鬘の下心どハきとこめそし給
かるすと内大臣方よいへのまつ竈、獣と箒よ入るゞこしとく　花晴日蓬花こての心もをを
らくろう細案竈ヾ竈よ入
しこめらうまきしまハおほむねそうの宮仕へとハ尚侍ハ不断禁中に伺候せねばなち
職ヽ玉鬘君みてもとしよりも父大臣の家の方ちのやうよ吾竈をあるべきことを
みしどりそしむきさぞハ尚侍よおもて里亭よ出て源の物よせんとしまふと内大臣ハこの
推量ヽ致の心もうくおか竹氏
まうたしハよされうと　孟玄実の後見よハおはすうなるは内府のうちへくるべ　孝義同
とひまもなしや　細うらき　孟おもねきを
不もるまこと　そるさまでん人のゆりふとう
らし

侍りしさまも亡ひもとひかりすひかるかい
細内大臣の心ゆるしておほするよ心をとまらぬし
さりかとさきはんすゝひるすうんし。今さとのゞ
しういつまよつけてをあへろうしんへこと　河筏役のこゝろ
わりるんこひゞ殿きすしやとつゝひ給。法乳分　細夕霧の心
もけぞやうすれど。御さうひハ物侍り。帰りく　夕霧の称えまひしるゝわれつゝ

けざやかなるまじくまぎれ
ちらなまうのがべをむつきに
宮仕人とそ源の御わけん
と思うけそろれよまじき
ことを内府のりしこと
かへしうまうし

くうふもうえりしきう
孟主上ハ主の中宮退引を
御ましそく宮位ヽ又心け
うら人ことへかれも心を
うつしくゝし

孟源のらうし
とさりやうく人のとしころおもはむとのこと　河人ハ雅意まかせるかとて云
心むらうを源の物としおもてせし
もわしうかバいと口おしくわたちもそこ
孟父大臣之
らゆうしうの物ゞよいかぞうくかゞうよ殿
とゝしをとしんとゆかをまそげよらや
づ人のおもちまそてげざやうるまし　まよ
ぶれさうゆわしと。うしこともひとり給　細人ハゆそろしくそひろとし
きうられとむくつけくゆがさろうくておぶ　晴ゆかろうきし
くるどぬぎすて月よてハるとまうり給　細八月之　師入内のこと
んうといつこあるべし。十月ばかりと覚し　細九月ハいむ月なれバ
の給をうらふもいりしみそくさうて男へし。
ゆうしまゝ人てやうれもくいと口おしくそて。　細無々の宮大将らうし
この御まつりのさうきよとゝころうとの人よ　玉くろの入内ヲおもよ宮仕りとゝへし　仲立ととゝし

かの〳〵ききを　細 耳と
さて〳〵かのさゝきハせ
きつとも人のかハいぐ
しぞなふ 孟 さゝらう
とうきんあへ

すぐよしなかはきめ僧まへどゝうし於との能を
きんよりも。かくきこしるれハいとをかしう
しとやのくつしめ中将もろこしくおちうし　細 夕顔と お おほかたしるし
とらぬくいろよりもなかしんとうきしき
よりけりあらきそいとわんばよ大かたのけ
まさことをなひおかうひさらさ縁もよそつるを
うしあり〳〵給さゝやさらくかしからよう　細 夕顔の蔦也
こ出くいとてしかりさ臨つらどかやすく
りてまかめまつかまくしのれたらしくの　孟 むの兄君也
君達いえもかこそ。まめづくへの宿のけくも
かことともものくんりとをすくぞなひける。　孟 柳木 然まへりけるとえるとも
頭中将ハうろとつくし僧しこといりつきさ

秋りそのぞき　細 頭中将
ハ実の兄君なれど源氏ま
さとい女ハまで 師 実の兄
君なるべしきさとうけづう
てもあつかるさなし
かくのかげよりくれて
花散里あれど云ともおぼえてぞ
ならぬ月のかくれかけに
つられて 新古今集
哭枕 月も荒庭の柱の蓮

えかくるを。うちつけにかられとも人に
の女房などのこ　細 内大臣よりの歌役に柳原出るかと
いかにしぶらよ。家のけはつひそかなるさ
秋まそのぞきかびやよ帰るそこそ
とききて給これども月のあるさ秋
つくのかげよりくれてりのつめくさ　細 庭の梅の木たまへし 師 柳木の露也
入へるとあるざりしを。名高かすくるれ　あひて今はなるもあるさこ
のこよそのま人よきへさすらじつきゆかく　柏木也
けふかしハしそ。まをつまりなれバ。　夕顔の住ところなれ
ねのえしそいうへさゝて給。なみ　細 柏木の縁
をえくひてきりまつるハへづそうする
此さうそこよしそ給らめうくりのよるを
くてえいかでききて子まへかくん。男つくし

そうでみそ侍らねど。うしぬらんひを給（細 兄弟のこと）
なりど。いつよぞやこぶいのしとうれど。この（細 折しりふ百さうぞへくこ）
りーくぞどひまへけりとて。まのしと思ひ給（兄弟多れハ都むらし）（入侍と田舎ひとし）
つけよ年ごろの一りうをとりそへて。（細 女ろうの定す）
こうてまわりしられど。日ごろおやえくるや
まいら侍れバ此はあづらるとまえし給
らくわんごくかぶくとぞ給も。かわくもて（くの文ハ帰りて陽て）
いらしれらるすんし給せうし。いと浮あ
ずうて此のし出しまつりおやましくれ（細 又柏木の詞こ）
そうらん。柏木丁のもどハゆうさ世給まよ（兄弟の衰ぐれバ流んやまくこと）
じらやりしくけよきてしさすうもら（輝り若戸も都るらす）
こうれそりしそ此ししの流せしそことじ（内大臣よりの世くそこ）

思びやうよまし給ふらういふどし人よよいとど（細 いつも立ちまづさぞくく盃見）
見給ひぞ。いとかやらし。まつり給へれど（抄 内く）
のあるいくらしこさ御もえさらねど。う（より内大臣惜見の詞こ）
ちくらよの給ひんるんらうらん。何るきもん（抄 内大臣へまうる門）（そ人銭よこうる世多てこ）
めよぞくらりてえまつらぞ。さうてしねこ（原よ相垂多人ぞ）
とをうん中くいづらく此がりしつるどもさ
見さうし給つりぐよ。いづらや此くがもしこさ（そねて柏木の詞こ。兄弟と云らで文）
こしもえぞきうしさとね。や。いづくさま浅（まうるせしうこ）
けくも。哀をいはらんじまぐらぐくやいあ
見るらし。いよくうらめしさと。そひ給られ。
まげいと夜るどの流りてるし。よこうご跡も（細 御しは方こ）
てどらくまかしいれらく。うら世こそめでさ御（細 幸ねるごこそ御隔）

いづ方よりみても　細 及申ね
の御兄弟と云ズくつさ
るゝハ去りで文るどし来
らせしるるうくふとえ
御所たとよひるど　細 つぐそ
うくうらくへも来り此ハ
こ…のごとく 盃 御ぐ御
むつふりの…
兩切りていくうさ 比面そ

内〳〵蘭を嘆の方と
するなし

けはんぐくと　細　侍り
こゝろをとゞめてけ侍
どろとぞおもひまゐらせて侍るさ
しく　花源の少将にも思ひ
のおもしろきて兄弟のよしみ
儀にむつびかはしたる
あるやうなるまじくて心を
ほりて對面するさうと
のことく

いもせ山　細　いもせハ兄弟を
いふ兄弟にもあらぬぞ
又おもしきにせふよ
としてゆくへの橋にふみ
いもしくゆくみえて

よくも見えしめさためしをつくへるとてこの
んぐくとぐまふらうつもりぬやなさうう
やうかわかしこくさぐくもめづらしくこと世
あいなしとこそふるめかしく恨みつべく
なもおぼしれハかくなんとさこ也げなん
ぞまとこゝろつけるやうもかくぞうん侍
るを御覧じよ年ごろのむすびさまにも
らぬ侍しのいとゆかしくたらしぼりくなん
と思ひすゝもてあるかに
ゆくてしる河をさつくり
いもせ山ふかき道をばたづねずて
をだえの橋にふみまよひける

ふ寄るにせうやし古今に侍の世のことみえ路のゆて山城のところにあらくるところ
のこゝるかたる所に二と侍る公他例あるへし　孟　柏木の方にて名所を二つかく名
よそくおもひかへしてゆくれもかへとりいもせハ兄妹のむつきいひ兄弟のあり
みもその兄代にハいひまだきいもうみの兄弟兄妹を御諸にする河海にあり
人やりならず　花　柏木の人
こゝちにあひかたりハ我が心
くものうそしく人やりならず
ねたうそうあり
まどひけるとは　孟　玉の
君の方に以中ねの方に
ところてくれもさとえん
しくしてからぞも文に
ゑくきり出かかりすれ
りひとかじくしえどもあり
とく我もとぞいかでかさを
これもいとあるむ面白き
ありか　細　何ゆへとも思ひ
ざりしとく
いづれのゆへとも　花　柏木
の兄弟と思ひて文と
びかうしやしん又何等
ゆへともおぼしわかざり
しとく
そのしりくのとこに

やりならずぞ
宰　まどひける道をばしらずいもせ山
たどたどしくぞたれもふみみし
いづれのゆへとか　宰相の君之
えおぼしわかざりけむなにごとも
いとあまりよのきこえをはゞかり
らせ給ふめればえきこえさせ
たまはぬになむおのづからかくのみも
はべらじときこゆるもさることなれば
よしながゐしはべらむも　細　柏木の心
すさまじきほどなりやうやうらう
つもりてこそはかごともとてたちたまふ月

今はそあれ自然みなるに 細 寧おの右のことらく離きとりて、おりろまり給ひけるを
うらんとよそと 晒 或本かくしきも安く叶ゆうく 師 なきものうらとつとてうそを
つ色るれとく。晒同 くらんとえ らんめす一動 なきのうち人をつぶ今も力着うく
でるかぐ書に云るすく

うくれるえくひ 師 夕
書もられきぬ比中く。
いづもとかくさき源さ
まどもうるとそて
あねたこの中ね八同しあ
まとけるれだ
孟 髭黒八太太政柏木八
致仕中ねと

こ夜をすくさしあぐりてぞくらのそらそも
えんなるよ。いとしあそやうよさとけむかりう
きらしてはるすとの 柳本の事也 もくさこのまして。
もれやうそていと助り。 孟 夕霧也 寧桐の中ねのけ
あひありさ夜よいえなしひ給ふるとこれ
をおもしろき。いとじくうれさくなし
なりんとわりきさんでとし。例のそうまち
さこそともよりさてめでおへぬも。 髭黒也 お筆は
このおねく 細 太政の右大臣の中ね也 助あり、右の大けまされかね。
しびとりつゆんぞうようくて 孟 内大臣也 八助ぐよ

きらやうあわるり 細 源のん
ぎーあふ故とそと氏太
氏の数拾し 孟 玉と源の
とふそえあ氏と文のと
ひあって
承香の女御 師 承香
今上の母承香殿と号そ
髭黒乃妹く

とりたてかうげうもいとおぼえ 細 太政大臣とりつり 師 紀梅の事を内大臣の事也 かりぐ
やけの比らしろくとかりぐへうあ
かうとよそとうハおりんと見へて 紀梅の事を 翁そてもすどくハ難おんの
かぐのうくたまふこともいうぐハこそうえ 細 源也
くもぐうんさうやうあゆるよ
うろうえまふるとらさんおれ 師 源氏の御けうくんの事也
こしまつりとのそねハ承香の女 孟 髭黒のゐんと云出事し承香殿の女御と号す
うるよぞおりしろ。助ぐしてら 孟 源内大臣より次ての見しと髭黒のよ
つとくさしつぎの比助わしいとやんごとな
さえなりとし坊二三の隔とありのし給 髭黒をいふ
おふの方ハ紫の上乃比おんぞうし。式部卿 細 紫上の兄弟と 晒 助わハいさよハ嫡女也
のみや乃比助かいそよ。年の程ぞるか

すゞろなとつけて
は媼 老嫗のこと
おかしきハきゝ女とよみしを 細流上の
六条の御かた
婦人ねの年 老ぬれば
見しをもすこしのけてハいらで
と説ハきとひきかし

女ハ父のつく人 抄 舞墨の説に
のこらしよ安すかく人ハ内大
臣ハわらびさらぬのやう
よハのあんどの父のくりハ
そのけをかゝげあるとき
てふれいしれまかし

か。このことはべしとかうかしきことをおかしね
と人々しやいひかはしけり。おほきなるを
つけてこゝろみもいれど。いかでかをしきらん
とさうりぞのまゝらよふり。六条の御かたハ大
ねの次ことハかげなくいとおかしかりしと見
しこうすめりいろめかしくらうきこゆれ
ある。さき夜なげらいづくぞとこゝろをつく
しあるさ給まゐの御かどことりてかゝれ
ても御かりしうしきなり。女ハ父づく人と御
かげよ御かりてさわりしじらくのそしき
をさなかくけりさまうしあれべりけ安
てらじ御かをのくれみをもむけのこゝろうよ

こそいあはれなれ。世おしきのゝやのまゝんぐるまき
ぐうぞならしこの弁のいたりしみかもをあらまし。
九月にもなりぬ。ぬがしろ霜もしもしかれえん
かなる給よ例のとりぐくかなはしうるまじど
ねの。門そぞきてつくりそてしまるかれ。みとど
とをすこしゆすくて。ゆきあはゆゆかならり
とをきて給ゑねどのくよハ。なにしのつんこしこ
ん二刻次のあしきてそ。なうろうづくしよ
くゐどゑすくハいぐいとをおもしき月よ命と
くろ給さそくるき月てそぞとあはさそこの
と。いとよく安給ゑありは。まゝのえへハばかひ
かゝる世ハ安えんとゝかるべき

ねうしハ 音勿救すべ。
九月ハ人のいむ月なれば
いとよくべきと。八月ても
御ハ三にりまつべきおよぶを
ある月ともそぞつくらぞ
二条よりそぞさらとし所九
月ハ世俗季のなそとして
いむとえんてべのらとうく
おとへそいぞかつれ月なそ

入団もちろさかぐ歩をだのかくに舎にうけらでむかがゆうるさこのかく
月さくハ　細　十月に内へまゐりけるをよくうらみ[illegible]
細　日さす　花　列くの[illegible]
けにそうなしく常の[illegible]
いくせつん我身しらずに。
細日さすら八天子を[illegible]
てし細日に封じて[illegible]
の君ハけさねやうに[illegible]
てられとふくし我[illegible]
ひきがれうなりとぞ
日によるうとも忘るひそ
とく
注　彼さへそうらあひさるや
細　西方の彼乃りあひら
ん。孟同　抄　[illegible]
風流の人なれバらけら
世に君の[illegible]を冬に
見へまうりそれを[illegible]
[illegible]の注に[illegible]
ぞりそうられるハ注彼も
[illegible]
[illegible]
武子々の文作注[illegible]のりく

細日さすひりとくそも[illegible]
君をなくずすとおしるん。如何しづまえしく。へ
なぐさむうつもあり、ぬべくなんとそ。いとゝ
けるうたしくさをれのをおとせとさぞりてま
いれ注彼さへぞうらあひさるや。我[illegible]の
文乃。注[illegible]へとのく[illegible]へぞ
りしきしくまゐりさどし絡[illegible]をれども
のづらいとおく抱のあれいも[illegible]をく
じらぞなひ[illegible]。いてしかりくらをつ
けらく
[illegible]すれるんと[illegible]も抱のりすらをといへる

師られも玉[illegible]にんうけうら人て家みうく始てたかまの[illegible]の[illegible]を[illegible]
よまれるん　細　事うら[illegible]事を御ひさる[illegible]　花[illegible]
ど忘れぞいうき白みしてハうき[illegible]よせん　義孝集

[illegible]しうねべくあり　細　[illegible]人
[illegible]ひまバなをうのより
うさ[illegible]ぬべうしく。今を
[illegible]なるべしとく

心うそ　細　けるぞもあり
[illegible]んとあつとうけさら。[illegible]
ハ細日にちよ抱く。[illegible]と
て身をたすらうら抱く。
されども日に向ふして君
をば[illegible]さざる抱く。そ
どくあうづらのをはに
[illegible]川さけも我心づう
なるますそハあうらえし。人
[illegible]せるうをなり　河[illegible]ハ

海みていかき海にさんりとのなすをつきに[illegible]
あるうもあひもさ海くなりと人[illegible]もされ
ゆかしきねべくあうてさらくしみれる
どいふなの注なりとそぞいつく[illegible]すらんぞ
いそくりまそ
心まて日影によむひよふあふひさるに網をく君
をなのれやいう川と沖のうちをいとぬん川
らしとを絡によいづうらいふ[illegible]をみつく川
そしなまりけあれバ。日ぞうりるれどうて
う[illegible]しうりきり。うなくまるふとるけ[illegible]

因にむかひて葵をうゑおけて根をうくるをりのし。孔子曰。鮑荘子が智不及葵。葵能衛其足
文集第十三ニ傾心傾日葵　畧記にも衛足の葵ハ二葉にあるぞとく
女のはらからへはらの名を示
よ
蝉　玉繁多と女の示
と定めふとし。業上ハ又
嶺たこもちくいふよ及ざ
こへし。此ハ比翼説なり
あしめるべし　細子孟御
説曰之花多説あすと孟曰

さ岡くおりんぐの法儀しるもかくり。女の
はらうわざんよこのことをるんれんよこすべ
らしかしらさごめさくしすへんり